

# 春秋戦国時代の南方諸国における神話・信仰と鳥書について

Relationship between Bird seal script and southern Chinese ancient myths and faith

坂田 光

Hikari Sakata

多摩美術大学大学院

The bird seal script is a kind of ancient seal script originated from China, during the Spring and Autumn Warring States Period. It mainly developed in the southern three nations such as Chu, Wu and Yue. It has a strange decorative figure, and it was considered unvalued.

Until Zhou era, Chinese characters were worshiped as a way to

Keyword : Chinese character, Typography

communicate with spirits. But, as the relationship disengaged between divination and politics, sacredness of the characters gradually decreased. But although, in southern areas of China, governance with ritual and reverence for hieroglyphic characters remained. The shape of the bird seal script was designed with much inspiration from ancient myths and faith.

## 1. 鳥書体についての概説

殷代・周代初期において、青銅器に刻まれた文字は神聖な祭儀のプロセスを写しとったものであり、神威そのものであった。しかし、周代が下ると共に儀式は形骸化し、文字の持つシャーマニズムの再現性は弱くなった。礼制を布いた周王朝は衰え、中国大陸は群雄割拠の春秋戦国時代を迎える。

「鳥書」とは、字画の中に装飾として鳥や虫の形を取り入れた書体である。祭器や武器に記す装飾的な文字として春秋戦国時代に中国各地で発達した。名の由来となった、鳥や虫の具体的な姿を取り入れたものは、呉・越・楚を中心とした南方諸国の文物に多い。

漢字書体の歴史の中では、甲骨文・金文と篆書体・石鼓文の間の時期に位置する。甲骨文、金文は具象性を残し、絵画的な字画を持っていた。一方篆書体においての字画は図形であり、文字は音声と意味を備えた記号である。鳥書は鳥など生物の形象を装飾に取り入れ、具象から離れつつあった字画に、重複して具象をあらわそうとした点で特殊な書体である。まつりごとと巫祝が離れつつあることを自覚しながら、器物に刻む文字に王の神聖性をあらわそうとした、古代王たちの工夫が見て取れる。

この研究は、殷代、周代の文物の装飾と鳥書の比較によって、鳥書に計画された神聖性の表現について明らかにすることを目的としたものである。

## 2. 古代中国と鳥について

古代中国において、鳥は神聖な動物の一つであった。特に鳳凰は風神として信仰された。「山海経」にはこうある。

「丹穴の山といい、頂上には金・玉が多い。丹水ながれて南流し、渤海に注ぐ。鳥がいる。その状は鶏のごとく、五彩で文あり、名は鳳凰。首の文を徳といい、翼の文を義といい、背の文を礼といい、胸の文を仁といい、腹の文を信という。この鳥たるや飲食はありのままに、われと歌い、われと舞う。これが現れると天下は太平である」(南山経)。

鳳凰は帝の象徴でもあった。中国神話における五帝の一人である舜は、四方をおさめる風神として四鳥を使ったと言われる。治世を表す語に「風」がつくことが多いのも、この名残である(風説・風俗・威風など)。

鳳凰は、五行説において南を司る「朱雀」と同一視されることがある。鳳凰が南を司るのには、南方の民族の風俗が関わっていると考えられる。「南」の字形は、南方のミャオ(苗)

族が祭器として使った銅鼓の形から来ているとされるが、その銅鼓に描かれた戦士は、舟の舳先や自身の頭に鳥の長い羽を飾っている。当時は五嶺を隔てた南方地域との交流があり、



図1-1 北方の造形の例 / 獣を象った衝立の台座 / 河北省平山出土 / 戦国時代(中山国)



図1-2 南方における造形の例 / 龍鳳紋を施した盾 / 湖北省荊門出土 / 戦国時代(楚)

その地方に住む鳳系の鳥を、神聖なものとして信仰していたようだ。古代中国史の神話への現れ方として、民族が征服される際には、その民族の先祖神がその地方を治める神として神話に組み込まれる例が多くある。鳳凰が後に朱雀となり、中国において神鳥となったのも、この例のひとつだろう。

### 3. 南方三国文化、歴史について

春秋時代の長江流域における主な国は、楚・呉・越の三国である。ここ数十年の研究により、長江流域には黄河文明に匹敵する規模の稲作文明が存在したことが明らかになっているが、これらの三国はいずれもその長江文明をルーツに持っている。ただし具体的にどのような経緯を辿って三国が発生したかは不明な点が多い。楚国の起源は苗族、呉・越は越族であり、BC5世紀頃から春秋時代後期にかけて攻防を繰り返したが、BC473年に呉は越に滅ぼされ、BC334年に越が楚に滅ぼされた。楚の興国の時期は不明である。

西周～戦国時代の文物を長江流域の南方と黄河以北で比較すると、北方の文物には虎などの獣が多く扱われており、力のみなぎりをダイナミックに表した造形が多い(図1-1)。対して、南方では龍や鳳凰をモチーフとした龍鳳紋が多く見られる。空中を飛翔する動きと、龍は体全体、鳳は特徴である長い尾を効果的に表現するため龍鳳紋は渦紋状であることが多く、それが複雑で繊細な南方の文様の特徴をより際立たせている(図1-2)。

また春秋戦国期においては、礼制を重視した西周王朝への反発から法の厳格な支配を進めた国が多かったが、楚国は南方の土着民族との交流を続け、それらの民族が持つシャーマニクな信仰を風俗として取り入れた。楚王本人も巫祝王として占卜による政治を続けていた。このような背景から、楚国の文物では様々な動物が神聖なトーテムとして扱われ、強い想像力の発揮された奇怪な造形物も多い。

### 4. 鳥書の造形について

春秋時代の鳥書を金文と比較し、具象性を減じていた字画が、どのように具象形と結びついているかを図表に表した。鳥書の例として「楚王子午鼎」(河南省淅川県出土)を取った(図2)。鳥書には鳳、小鳥、老人、鶴など、様々な物の形が取り入れられているが、字画にそれらの形を取り入れる際、字画同士を寄り添わ

せ、更に添った線に肥瘦の抑揚を付けて線の流れを強調する傾向が見られた。また、字義やその元の形象と鳥書を比較した結果、取り入れられる具象物に字義や形象と関わりがあるか否かはまちまちであった。例えば、鳥の形象文字である「佳」のように、鳥書以前の金文書体においても具象性が残っている文字についてはその形象を活かした変形がなされている。一方で「文」の文字の形象は衣服の襟元のさまであるが、鳥書体では飛ぶ鳥の形であり、字義・形象と直接の関わりはない。しかし、これは私の想像であるが、シャーマニズムを重視し、文字に表現しうる呪術性に対して自覚的であった楚においては、文字への具象性の取り込みにも意識的に楚の文化や信仰が関わっているのではないか。この銘文の中にある「永」の文字も、元の水の流れる形象に対して、鳥書では口を広げた蛇の姿である。中国神話において、蛇と水・洪水は関わりが深い。また、「考」「孝」の「耂」は老人の頭を元の形象とし、鳥書でも人の頭として作られているが、字画の左右をはね上げた形は、苗族が祭りの際に身につける髪飾りや、髪が長いほど美しいとされる文化を連想させる。

### 5. 終わりに

鳥書はそのあまりに装飾的な形から、書体史においては重要視されていなかった。また、長江流域についても黄河に比べて研究の歴史が浅く、南方諸国の文化についてはわからない点が多い。しかし、シャーマニクな南方諸国の政治と、甲骨文、金文の呪術性、及び可読性よりも視覚的な効果を重視した造形を持つ鳥書を並べて見ると、鳥書には文字の言語伝達機能に加えて、図形の印象を操り、神話・信仰と関わりを持たせることによる、神聖な精神を伝えるためのデザインがなされていると考えられる。文字デザインにおける一つの例として、南方諸国の民俗や視覚効果面からの分析を含めた、研究の価値があるだろう。

参考文献  
劉煒編著・何洪著『図説中国文明史3 春秋戦国 争覇する文明』萩野友範訳、創元社、2007年  
白川静著『字統』平凡社、2004年  
『山海経』高馬三良訳、平凡社、1994年  
石川九楊著『書の宇宙1 天への問いかけ・甲骨文・金文』二玄社、1996年

図2 楚王子午鼎における鳥書

